

授業力向上に向けての取組

—「授業実践事例集」の作成における研究—
～子供が主体的・協働的に学習する授業づくり～

学校経営支援課 植原 浩之 藤山 三樹
大井 育代 林 隆宏

要 旨

経験年数の浅い教員の授業技術を向上させるため、3年計画で、授業実践に役立つ具体的な事例集を作成することとし、これまでに、「とくしま 授業技術の基礎・基本」、「とくしま 授業技術の基礎・基本2」を作成した。3年次の今年度は、子供が主体的・協働的に学習する授業づくりとして、具体的な授業実践事例集を作成した。

キーワード：授業点検シート，授業振り返りシート，学級・学習集団づくり，
教材研究，単元（題材）設定，学習評価

I はじめに

経験年数の浅い教員の基礎的・基本的な授業技術を向上させるため、学校経営支援課義務教育担当では、これまでに「とくしま 授業技術の基礎・基本」、「とくしま 授業技術の基礎・基本2」を作成した。本研究は、3年間の継続研究で、1年次「教師が授業中に必要とする授業技術」、2年次「児童生徒を主体的に取り組ませるために必要とする授業技術」、3年次「教師が授業前、授業後に行う授業技術」の3年次に当たる。

平成26年度は、授業力向上研修（教職2年目）の教員を対象に「授業点検シート」「授業振り返りシート」を用いたアンケート調査を行い、経験年数の浅い教員が求める授業技術は何かを把握した。まずは「教師が授業中に必要とする授業技術」に絞った基礎・基本の手引きを作成し、その経緯等を、本センター研究紀要第94集にまとめた。平成27年度は、その続編として、「児童生徒を主体的に取り組ませるために必要な授業技術」を研究し、基礎・基本の手引きを作成し、その経緯等を、本センター研究紀要第95集にまとめた。さらに、今年度は、「教師が授業前、授業後に行う学習の基盤づくり」を研究し、授業実践事例集の作成を進めてきた。

II 研究の実際

- (1) 平成26・27年度に作成した「授業実践事例集（とくしま 授業技術の基礎・基本）」を本センターのWebページに掲載し、各小・中学校，高等学校，特別支援学校において校内研修等に使用できるようにした。また、本センターで行う基本研修（初任者研修，授業力向上研修，教職5年次研修，10年経験者研修）において、当事例集を用いた指導を行い、内容の共通理解と周知を図った。さらに、授業力向上研修（教職2年目）の受講者に、当事例集についてのアンケート調査を行い、よりニーズに合った事例集に改善するための情報を得た。
- (2) 昨年度の続編として、「学級・学習集団づくり」、「教材研究」、「単元（題材）設定」、「学習評価」の4項目についてまとめた。

Ⅲ 学級・学習集団づくりについて

1 「とくしま 授業技術の基礎・基本」の活用状況に対するアンケート結果の分析から

平成27年度授業力向上研修受講者を対象としたアンケートの質問項目「授業の事前準備や授業後の事後指導等を行っていく中での、不安や悩みについて」の中に次のような記述が見られた。

- 関心・意欲を高められる授業ができない。(小学校)
- 児童のモチベーションをどのようにして保たせるのかが難しい。(小学校)
- 学力の定着を図るための学習に対する意欲づけについて。(小・中学校)(高等学校)
- 学習習慣のない生徒への指導が難しい。(中学校)
- 指示の通りにくい生徒に対する指導が難しい。(特別支援学校)

このように、経験の浅い教師が抱える不安や悩みの実態が明らかとなった。特に、「学力の定着を図るための学習に対する意欲づけ」については、すべての校種において記述が見られた。そのため、学習に対する意欲づけの基盤となる学び合い高め合う学級集団の形成が、これらの解決の一助となると考えた。特に、児童生徒一人一人の自立性・自主性を育てることが、互いに学び合う学級・学習集団につながるとともに、発達段階に合わせた意図的な指導を継続的に行うことが必要であると考えた。

これらのことから、学級・学習集団づくりを進めていく上での大切なポイントを3つに絞って示すこととした。

2 学級・学習集団づくりの3つのポイント

(1) ルールの定着

よりよい学級集団では、児童生徒が安心して過ごすことができ、他者との関わりの中で自らの良さを発揮することができる。ルールは、みんなで一緒に活動するためのベースになるため、次の3点を意識することが求められる。

① ルールとその意義を確認する。

ルールは短く、わかりやすく伝えることが大切であり、教室内に掲示することで視覚的に働きかけることも必要である。

② ルールに沿った行動ができた場合はほめる。

ルールを守ることができている児童生徒をほめることによって承認し、逸脱行動に同調しないようにすることが大切である。

③ 逸脱行動には毅然と対応する。

間を十分とって、冷静に対応するとともに、授業外の場面で丁寧な個別指導を行うことが必要である。特に、「このくらいはいいだろう」と見て見ぬふりをしてしまうことや中途半端な対応をしてあきらめてしまうこと、必要以上の厳しい叱責を行うことは避けるべきである。

(2) リレーションづくり

すべての児童生徒にとって、日々の学級生活や授業の中で自己肯定感や自己有用感が高められ、「学級の居心地がよい」「みんなから認められている」といった実感の伴ったものにしていく必要がある。そして、このような状態を目指していくことは、今日の学校における様々な問題解決につながっていくと考えられる。

児童生徒が学校生活の中で最も長い時間を過ごすのは教室である。何か特別なことをするのではなく、少し意識することで、リレーションづくりができる。その際には、次の3点を意識

するとよい。

① 教師の働きかけ

児童生徒の発言やがんばり、よさを多面的に認める姿勢をもつことが大切である。また、目立たない子供の意見を取り上げたり、プロセスを重視して間違っただけの答えを正しい答えとの比較に用いたりすることも大切である。

② 場の工夫

自分の考えをペアやグループで発表する活動を取り入れるとともに、授業の最後に、わかったことや感想を取り入れる場を設定することも大切である。また、様々な機会を通して、児童生徒同士で認め合える場を設定するとともに、一人一人に役割のある班活動を取り入れることも有効である。

③ エクササイズを活用

授業の導入、朝の会・帰りの会などを利用して、ピア・サポートや構成的グループエンカウンターエクササイズに取り組むことが有効である。

(3) 個と集団の視点

個別の指導・支援を必要とする児童生徒に対して適切な対応を行うためには、個別の指導・支援を充実させるだけではなく、すべての児童生徒を大切にする学級づくりや分かりやすい授業づくりを行うことが大切である。特に、集団への指導・支援と個別の指導・支援の2つの視点をもって取り組むことが重要である。また、個別の指導・支援を行うに当たっては、学級担任が一人で対応できることと、できないことを理解した上で、他の教職員の協力を得る等、学校全体としてどのように支援していくかを考えることが大切である。

3 教師の授業力を高めるための基盤づくりと学級・学習集団づくりについて

児童生徒が安心して学校生活を送り、学習意欲や自信を持つためには、教師と児童生徒、児童生徒同士の好ましい人間関係を築くとともに、児童生徒がわかる・できる授業づくりを積み上げていくことが必要である。そして、児童生徒自身が他者に行った働きかけにより他者から認められ、評価されるというように、

他者の存在が前提となって生まれる「自己有用感」を高め、いくことが大切である。そこで、教師は児童生徒が「自己有用感」を高められるような学級・学習集団づくりを行うことが必要となってくる。そのためにも、心の安定を図るために、主体的な学びと協働的な活動の中で、確かな「絆づくり」ができる学級・学習集団にしていけることが大切であると考える。

学級・学習集団づくりについて

「学級・学習集団づくり」は、授業づくりの基礎です。子供たち一人一人を育てることが、互いに学び合う学級・学習集団づくりにつながります。自主性・自律性が育つ学級・学習集団を自覚し、発達段階に合わせた意図的な指導を継続的に行うことが必要です。

ポイント1…ルールの定着

① ルールとその意義を確認する。
② ルールを守れた場合は承認する。
③ 逸脱行動には毅然と対応する。

ルールは小さなところからほんのりできます。小さなことでも確実にやるという教師の姿勢を示すことが大切です。教師が指導をしている姿から子供たちも学んでいきます。

ポイント2…リレーションづくり

① 教師の働きかけ
子供のよさを多面的にとらえ、日頃のがんばりや発言をしっかりと受け止めるとともに、発言の少ない子供の意見を取り上げたり、間違っただけの答えも大事にしたりする。

② 場の工夫
自分の考えをペアやグループで発表できる活動を取り入れるとともに、子供たちがお互いに認め合える場を設定する。

③ エクササイズの活用
ピア・サポートや構成的グループエンカウンターなどを取り入れることによって、意図的・継続的なリレーションづくりが促される。

日々の授業でのふりかえりを少し意識することによって、リレーションづくりができます。

ポイント1…ルールの定着

ポイント2…リレーションづくり
ポイント3…個と集団の視点

子供が安心して過ごすことができるための「ルールづくり」、一人一人の違いを認め支え合える「リレーションづくり」の確立が大切です。

子供が安心して過ごすことができるための「ルールづくり」、一人一人の違いを認め支え合える「リレーションづくり」の確立が大切です。

ポイント3…個と集団の視点

① 個への指導・支援
子供の姿を肯定的に捉え、子供一人一人を理解する。子供の苦手な部分を補う視点で具体的な支援策を考える。「ほめる」「認める」機会をつくる。

② 集団への指導・支援
すべての子供を大切に育てる学級づくり、どの子供にもわかりやすい授業づくりを努める。(ルールの定着とリレーションづくり)

個への指導・支援を行うに当たっては、学級担任が対応できること、できないことを確認し、学級担任だけで対応が難しい場合は、学校全体で対応を考えていくことが大切です。

よりよい学級集団づくり
学級集団づくりでは、子供たちから信頼を得ることが大切になってきます。次の図は、子供たちの層を、学力と指導の関係を軸に分けたものです。

学力(高)	指導に対する受け入れ
A層	学力は高く、教師の指導に対する受け入れも高い。
B層	学力は高くはないが、教師の指導に対する受け入れは高い。
C層	学力は高いが、教師の指導に対する受け入れは低い。
D層	学力は高くなく、教師の指導に対する受け入れも低い。

私たちは、どうしても支援が必要な子供たちに目がいきがちで、その個別対応に追われてしまいがちです。しかし、どの層にもまじめに取り組んでいる子供たちがたくさんいます。すべての子供たちの学習意欲を喚起し、発言やがんばりをしっかりと認め、大切にすることが、学級・学習集団づくりには大切になってきます。

◎ 一人一人の子供を育てることが、互いに学び合う学級・学習集団づくりにつながり、教師の姿勢が子供を導くことにつながります。

◎ そして、それぞれの学級経営方針を明確にし、組織に関わる体制づくりも必要になってきます。

図1 学級・学習集団づくりについてのリーフレット

IV 教材研究について

1 「とくしま 授業技術の基礎・基本」の活用状況に対するアンケート結果の分析から

「授業の事前準備（授業構想等）や授業後の事後指導を行っていく中での、不安や悩みについて。」〈複数回答可，自由記述〉において，小学校60人中34人，中学校39人中21人，高等学校27人中18人，特別支援学校15人中7人，養護教諭18人中9人とすべての校種において，半数以上の教師が「教材研究」に関する不安や悩みを記述している。

具体的には，次のような記述が見られた。

- どのような教材をつくれば，わかりやすいのか。（小・中学校）（特別支援学校）
- 教材を作成するときの留意点を教えてほしい。（小学校）
- 様々な教科で教具をつくるのが大変である。（小学校）
- 使用したい教材や教具を十分に用意できない。（小学校）
- 準備に時間がかかりすぎる。（小・中学校）
- 興味関心を引きつける導入には，どのような教材が必要か。（中学校）（養護教諭）
- 個々の生徒の実態に沿ったワークシートの作り方。（高等学校）（特別支援学校）
- 生徒がやりがいを感じ，意欲的に取り組むことができる教材の設定が難しい。（特別支援学校）
- 知的に重度の子供の教材について。（特別支援学校）
- 保健指導と違い，保健学習をするので，理解させたい内容の精選が難しい。
- ワークシートの作成で，ポイントを押さえるところが難しい。（養護教諭）

また，「学習指導案の作成」についても，小学校60人中21人，中学校39人中13人，高等学校27人中8人，特別支援学校15人中7人，養護教諭18人中9人が不安や悩みを記述している。

このように，アンケート結果から，子供が主体的・協働的に学習する授業づくりを行う上で，教材研究が重要であることを理解しながらも，どのような観点で授業づくりに取り組むかに苦慮していることが分かってきた。そこで，教材研究について，「授業づくりは，教材研究から」，「教材研究のすすめ方」，「主体的に学ぶ教材」という3つのポイントにまとめた。

2 教材研究についての3つのポイント

（1）授業づくりは，教材研究から

授業づくりは，教材研究から始まる。教材研究は，児童生徒の実態に照らして教材の価値を見極めることであり，その教材を用いることにより，児童生徒にどのような力を身に付けさせることができるかなどを明らかにすることである。

一人一人の児童生徒の学習する姿をいろいろな面から推測しながら，その教材の取り上げ方を検討することが重要である。

また，児童生徒が興味関心のある教材であっても，学習指導要領が示す目標・内容を実現する授業でなければならない。したがって，決められた時間の中で効率的な指導が求められるため，児童生徒の実態に応じて指導内容の精選や重点化を行うことが必要である。計画的な授業を実施するためにも，教材研究は重要である。

（2）教材研究のすすめ方

教材研究のスタートは，学習指導要領とその解説の熟読と理解である。指導する目標・内容がはっきりしなければ，児童生徒にどのような力を付けるのか，そのために何を教材として取り上げればよいかなどを明らかにすることはできない。また，学習指導要領が示す目標

・内容から見て、目の前の児童生徒たちには何が足りないのか、どのような力を付けければよいのかを熟慮し、どのようなことに興味関心を寄せ、どのような課題を持ち、探究活動をするのだろうと想像しながら、教材の取り上げ方や学習活動の展開などを検討することが大切である。

授業は、1単位時間が基本であるが、その1単位時間は単元全体の中でどのような位置付けにあるのか、前時までに押さえるべきことは何か、次時以降どのように発展するのかなど、単元全体の指導の在り方を工夫しながら、本時の教材研究をすることが大切である。また、教材に関わる学習内容は、前学年のどのような内容に関わり、同学年の他単元とどのように結びつき、次学年へどのように発展していくのかなどを把握しておくことも大切である。

(3) 主体的に学ぶ教材

意欲的な取組は確かな理解へと結びつく。学習意欲を高めるためには、その教材が児童生徒にとって興味のあるものかどうかポイントになる。これまでの学習経験や生活経験、発達段階などを考慮して、児童生徒にとって興味や関心のある教材選びをすることが大切である。ある素材が学習の対象となるためには、そこに児童生徒の疑問や問題意識をかき立てる要素が含まれていることが必要である。探究を進める中でさらに新たな疑問が生まれ、探究が連続するような教材の取り上げ方を工夫する必要がある。児童生徒の疑問をかき立て、学習意欲を高める教材であっても、探究のための具体的な学習活動が組みにくいものも少なくない。児童生徒自身では課題解決が困難な教材もある。課題解決のために児童生徒自身が見通しを持ち、多様な活動を工夫しやすい教材を取り上げることが必要である。また、児童生徒の生活との関わりが具体的に見える教材であれば、意欲的な探究を促進させ、学習したことを実践に結び付けやすくなる。さらに、教材が児童生徒にとって普段目にしたり体験したりしている身近なものであれば、疑問を持たせやすく、新たな疑問が生じたときなどに繰り返し見たり体験したりしやすく、より自主的な探究活動を行わせることができる。

3 主体的に学習する児童生徒を育てることと「教材研究」について

質の高い教材であっても、最初の出会いにつまずくと、児童生徒の探究意欲をかき立てることはできない。主体的に学習する児童生徒を育てるためにも教材との出会いは重要である。これまでの学習経験などでは説明ができないようなことや、これまでの学習内容と矛盾するようなこと、「きれい」「大きい」などの驚きを誘うようなことといった視点で教材の提示を工夫することが効果的である。学習課題は、本時のねらいを十分に達成できるものであり、児童生徒自身の課題でなければならない。そのためにも、「教材研究」は重要であると考える。

教材研究について

料理の世界に「材料七部」という言葉があるそうです。料理する際にいくつもの材料が必要ですが、料理の世界も同じではないでしょうか？子供の疑問を高め、深い理解ができるようにするには、よい材料を上手く見極め、そのよさが生かせるように調理法を駆使しながらよい教材に仕上げる視点が要求されます。

ポイント1…授業づくりは、教材研究から

授業づくりは、教材研究から始まります。私たちの周りに、**宝石(真材)**がたくさんあります。この宝石を子供にとっての「ダイヤモンド」にするのは、教師の責任です。

- 教材の価値を見極める。⇒(子供にどんな力を身に付けさせることが出来るか)
- 子供を理解する。⇒(品性・能力・生活の状況や学習意欲を把握する)
- 計画的な指導・指導的指導をする。⇒(理解に応じて内容を精選し、量を決める)

ポイント2…教材研究のすすめ方

- 学習指導要領とその解説の熟読・理解
指導する目標・内容を正しく把握し、子供にどんな力を付けるのか、そのために何を教材として取り上げればよいかなどを明らかにしよう。
- 目指す子供の姿
学習指導要領が示す目標・内容と目の前の子供たちの実態を照らし合わせ、目標とする子供たちの姿を想像しながら、教材の取り上げ方や学習活動の内容などを検討しよう。
- 1授業時間から単元全体の教材研究へ
この教材に関わる学習指導要領の目標・内容は、前の学年や後学年の後の内容とどのような関係にあるのか、さらにはどの学年のどんな内容と結びつき、どのように発展していくのかなどを把握しておくことも大切である。
- 系統性、発展性、関連性
この教材に関わる学習指導要領の目標・内容は、前の学年や後学年の後の内容とどのような関係にあるのか、さらにはどの学年のどんな内容と結びつき、どのように発展していくのかなどを把握しておくことも大切である。

ポイント3 主体的に学ぶ教材

- 強い興味や関心をかき立てる教材
学習意欲を高めるには、子供たちのこれまでの学習経験や生活経験、発達段階などを考慮して、子供にとって興味や関心のある教材を選びをすることが大切である。
- たくさんの疑問から、確かな理解へとつながる教材
ある素材が学習の対象となるためには、そこに子供の疑問や問題意識をかき立てる要素が含まれていることが必要です。探究を進める中でさらに新たな疑問が生まれ、探究が連続するような教材の取り上げ方を工夫しよう。
- 具体的な学習活動と一体化する教材
学習活動が組み立てられつつあり、子供の学びでは課題解決が困難であったりする教材では意欲がありません。課題解決のために子供自身が見通しを持ち、多様な活動を工夫しやすい教材を取り上げることが必要です。
- 自分との関わりが具体的にわかる教材
自分たちの生活との関わりが具体的に見える教材は、意欲的な探究を促進させ、学習したことを実践に結び付けやすくなります。
- 子供にとって身近な素材の教材化
その教材が子供たちにとって、普段目にしたり体験したりしている身近なものであれば、疑問を持たせやすく、新たな疑問が生じたときなどに繰り返し見たり体験したりできるため、より自主的な探究活動へとつながっていきます。

質の高い教材であっても、最初の出会いでつまずくと、子供の探究意欲をかき立てることができません。強い興味関心、探究意欲の醸成です。教材とどのような出会いで子供たちが自分たちと関わることができるかを工夫することも重要である。

子供と教材の出会いを工夫する視点

- ☆これまでの学習経験とは異なる視点で教材を捉えよう
- ☆これまでの学習内容と関連するよう仕立てよう
- ☆「きれい!」「大きい!」などの驚きを生み出そう

- 学習課題は、本時の学習のねらいを十分に達成できるものであり、子供自身が取り組むことのできるものでなくてはなりません。教師の想定した学習課題であっても、子供の疑問をもとにして、子供自身が自分たちの課題だという意識を持たせることが大切です。
- 個々の疑問から学習がスタートしても、個々の疑問を高めて学習全体の共通の課題として一人一人に把握させる工夫が必要です。

図2 教材研究についてのリーフレット

V 題材（単元）設定について

1 「とくしま 授業技術の基礎・基本」の活用状況に対するアンケート結果の分析から

アンケートの質問項目「授業の事前準備や授業後の評価等における不安や悩み」における題材（単元）設定に関する記述は、次の通りである。

- 授業構想を考えるのが難しい。（高等学校・養護教諭）
- 授業の進め方，最終的なゴールを明確に定められないまま授業に臨んでいる。（中学校）
- 児童生徒に意欲を持たせる発問。（小学校）
- 実践例などが知りたい。（小学校）
- 生徒が意欲的に取り組むことができる教材の設定が難しい。（特別支援学校）
- 1時間の具体的な流れや，活用する力を育てる手立てなどが載っているとわかりやすい。（中学校）
- 授業で用いるワークシート，授業の進め方，最終的なゴールを明確に定められないまま授業に臨んでいる。（中学校）
- ワークシートの作成で，ポイントを押さえるところが難しい。（養護教諭）

「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善）を実現するためには、「言葉による見方・考え方」，「数学的な見方・考え方」など，各教科等における学習対象を捉える視点や考え方を，指導内容と関係付けて示すことが大切である。そして，児童生徒が学習対象と深く関わり，理解の質を高めていくことができるような教材や指導方法を工夫する必要がある。アンケート調査の記述からは，①授業を構想し，発問を構成すること，②具体的な授業展開，③学びの振り返りにつながるようなワークシートの作成に苦慮していることが分かる。そこで，題材（単元）設定についてのポイントを，「学習課題の構造化」，「子供が言葉を駆使して表現する場面の設定」，「ワークシートの工夫」という3点にまとめた。

2 単元（題材）設定についての3つのポイント

（1）学習過程の構造化

- ① 複数の観点から追求することのできる課題であるか。
- ② 複数の情報に当たる必要のある課題であるか。

各教科の「見方・考え方」が，既習の知識・技能と結びつきながら生きて働くものとして習得されたり，思考力・判断力・表現力を豊かなものとしたり，社会や世界にどのように関わるかを意識させたりするためには，単元（題材）設定に当たって学習課題を工夫する必要がある。問いの中には，答えが確定できるものと，答えが確定できないものがある。答えが確定できない問いを単元（題材）全体で考えるべき学習課題として設定し，そのほかの問いを下位の問いとして学習過程を構成するとよい。

例えば社会科における，「何年にこうした出来事が起きた」という歴史上の事実に関する知識は，「その出来事はなぜ起こったのか」，「その出来事がどのような影響を及ぼしたのか」を追求する学習過程を通じて，知識相互がつながり，関連付けられながら習得されていく。このようにすることによって，その出来事が当時の社会や現代の社会において持つ意味などを捉えさせ，社会における様々な場面で活用できる概念とすることが重要となる。

(2) 言葉を駆使して表現する場面の設定

問題を解決した後、さらに発展させて新たな問いを発見させたり、条件の異同を確認しながら理由を考えたりする学習を設定し、どうしてそう考えるのかを問い返したり、実際に調べたりして、考える道筋やそうなる理由について、説明できるようにすることが大切である。

例えば、算数の「1 辺の長さが 6 cm の正方形の縦の長さを 1 cm 短くし、横の長さを 1 cm 長くすると、面積はどうなるか」という課題では、できた長方形の面積が、もとの正方形の面積より 1 cm^2 小さくなることを確認し、変える長さを 2 cm にすると、面積がどのように変わるかを予想させることで、条件を変えても同じ結果になることに気づかせたり、予想と異なる結果になったときに疑問を持たせたりすることができる。

(3) ワークシート等の工夫

未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」の育成のためには、これまでの学習で身に付けた力をどのように用いれば、本単元（題材）の課題を解決できるのかを、児童生徒自身に考えさせ、判断させる工夫が求められている。そのためには、児童生徒が物事の中から問題を見出し、情報を集め、解決の方向性を決定した上で結果を予想しながら問題解決に取り組むこと、学びを振り返って次の問題発見・解決につなげていくことが重要である。その際、児童生徒が自分の考えの形成を自覚しながら学習を進めることができるような可視化の工夫をすることが大切である。このような視点に立ってワークシートを工夫することは、教師にとっても、児童生徒の思考がどのように進んでいるのか、どこで滞っているのかを把握して指導をすることができ、指導の充実につながると考える。

3 主体的に学習する児童生徒を育てることと題材（単元）設定について

「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」には、学習活動を児童生徒にとっての学びの過程として捉え直し、「子供の実状や指導の内容に応じ、授業の組み立て方や重点の置き方、具体的な指導方法について、幅広い創意工夫が期待される」と示されている。

単元や題材のまとまりの中で、指導内容のつながりを意識しながら、効果的な単元の開発や課題の設定に関する研究を進め、発信していくことが求められている。

単元（題材）設定について

各教科の「見方・考え方」が、既習の知識・技能と結びつきながら生えていくように育てられたい。子供は「見方・考え方」を身に付け、社会生活にかなものとして、社会や世界との関わりを意義させたりするように、単元（題材）設定を工夫しよう。

ポイント1…学習過程の構造化

① 複数の観点から追究することのできる課題であるか。
② 複数の情報に当たる必要のある課題であるか。

【中学校 国語「忘れメロコ」の場合】

登場人物について
道順太郎は誰の物語か？ 誰の物語か？

大分県に暮らす道順太郎の物語か？（道順太郎）と道順太郎は誰の物語か？（道順太郎）

道順太郎が誰か？ 道順太郎は誰の物語か？（道順太郎）と道順太郎は誰の物語か？（道順太郎）

道順太郎は誰の物語か？（道順太郎）と道順太郎は誰の物語か？（道順太郎）

ポイント2…子供が言葉に駆使して表現する場面の設定

問題を解決した後、さらに発展させて新たな問いを発見させたり、条件の異同を認識しながら理由を考えたりする学習を設定しよう。

【小学校 算数「量と単位」の場合】

ポイント1…学習過程の構造化

条件を変えてみる

1辺が7cmのとき 1辺が8cmのとき

たて 横 面積

7 × 7 = 49 7 × 8 = 56

2cm長く 2cm長く 2cm長く 2cm長く

5 × 9 = 45 6 × 10 = 60

面積は4cm小さくなる 面積は4cm小さくなる

規則性を見つかる

どうしてそう考えるのかを問ひ返したり、実際に測ったりして、考える過程、そのような理由について、説明できるようにしよう。

1辺が9cmのとき、面積は4cm²小さくなるね。変えた長さとは2cmの差に、面積は4cm²小さくなったわけは、…

ということは、辺の長さを3cm変えたとき、面積は9cm²小さくなるのかな。

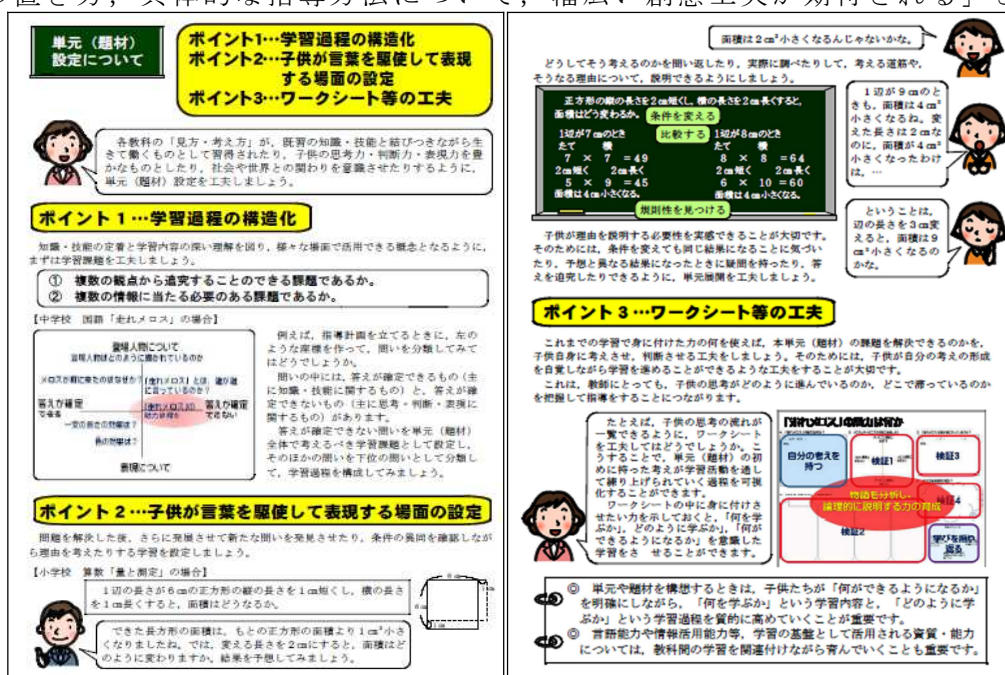


図3 題材（単元）設定についてのリーフレット

VI 学習評価について

1 「とくしま 授業技術の基礎・基本」の活用状況に対するアンケート結果の分析から

アンケートの質問項目「授業の事前準備や授業後の事後指導等を行っていく中での、不安や悩みについて」の中に次のような記述が見られた。

○十分満足できる状況とは、どのような状況なのか。(小学校)

○指導と評価の一体化ができていない。(小学校)

○評価方法について知りたい。(小・中学校)

○毎時間、評価する余裕がない。(中学校・高等学校)

○評価規準の設定が難しい。(高等学校)

○目標設定が生徒に合っているのか、評価規準は妥当なのか不安に思う。(特別支援学校)

このように、指導者が、学習評価に関して多岐にわたる疑問や不安をもっていることが明らかとなった。また、学習評価の本来の目的である指導改善に生かすという面からは、評価を実際の授業に上手く活用することができていない現状があることも明らかとなった。これらのことから、学習評価について「学習評価とは」、「具体的な子供の姿」、「学習評価の仕方」の3つのポイントに整理して、上述の実態における課題を解決することができるようにまとめた。

2 学習評価についての3つのポイント

(1) 学習評価とは

① 学習評価の在り方

学習評価については、児童生徒一人一人の進歩の状況や教科の目標の実現状況を的確に把握し、学習指導の改善に生かすことが重要であるとともに、学習指導要領に示された内容が確実に身に付いたかどうかの確認に資することが重要である。そのため、「児童生徒にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒一人一人が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにすることが求められる。

② 学習評価の実際

次に示す5つのこと(4W1H)「誰が」(Who)、「何を」(What)、「いつ」(When)、「どの場で」(Where)、「どのように」(How) 評価するのかを明確にする。

(2) 具体的な子供の姿

① 実現(体現)している具体的な児童生徒の姿の明確化

児童生徒の学びの姿がどのようになれば目標を達成したのか、または、迫ることができたのかについて、児童生徒のあるべき姿を明確にすることが重要である。その際、授業の中で現れることが予想される児童生徒の姿を具体的に想定しておくことが求められる。

② 学習評価の妥当性、信頼性

評価については、妥当性、信頼性を高めるよう努めることが重要である。評価結果と評価しようとした目標との間に適切な関連があること(学習評価が学習指導の目標に対応するものとして行われていること)が求められる。

(3) 学習評価の仕方

① 単元を見通しての評価計画

1 単位時間ですべての観点について評価するのではなく、単元全体を通して、バランスよ

く評価することが大切である。また、評価のための負担が重くならないように配慮して作成することが重要である。

② 授業中における学習評価の生かし方

「授業中における学習評価の生かし方」とは、授業展開における評価を適切に行い、その後の授業展開に評価を反映させることを意味している。

つまり、学習活動の中で、設定した評価基準に基づいて、児童生徒の様子をよく見取りながら授業の舵取りをすることである。そのことにより、場面に応じて間をおいたり、もう一度先の場面に戻ったりするなどの柔軟な授業展開が生まれてくる。児童生徒の意識や思考の流れに沿った授業展開にしていけば、児童生徒にとって必然性や必要感のある授業になる。その結果、高い学習効果を生み出すことにつながるのである。

③ 「関心・意欲・態度」の評価

学習評価の仕方で悩む観点の1つに「関心・意欲・態度」がある。単元を通しての毎時間の評価の平均や「よく発表している」、「忘れ物がない」、「まじめに取り組む」などのように、単元の学習内容に関係しない教師の感じ方や主観等、曖昧なもので評価してはならない。

単元の途中の意欲的な姿や、後半の学習意欲の高まりの評価を重視するなど、学習活動全体を通して捉えることが妥当だといえる。

3 主体的・協働的に学習する児童生徒を育てることと評価について

主体的・協働的に学ぶ児童生徒を育てるためにも、授業中における具体的な姿を想定し、その姿に基づいて、手立てを講じることが肝要である。単元や本時の目標を達成した姿や目標に迫ることができている姿とは、どのような姿なのかを指導者が明確にすることにより教育効果は上がる。したがって、評価方法の工夫改善を含めた学習評価の充実を図ることは、主体的・協働的に学習する児童生徒を育てる上で重要なことである。

また、これからの評価としては、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価を取り入れ、テストの結果にとどまらない多面的な評価を行っていく必要がある。また、総括的な評価のみならず、一人一人の学習過程における形成的な評価を行い、子供たちの資質・能力がどのように伸びているかを日々の記録やポートフォリオなどを通じて把握できるようにしていくことも考えられる。

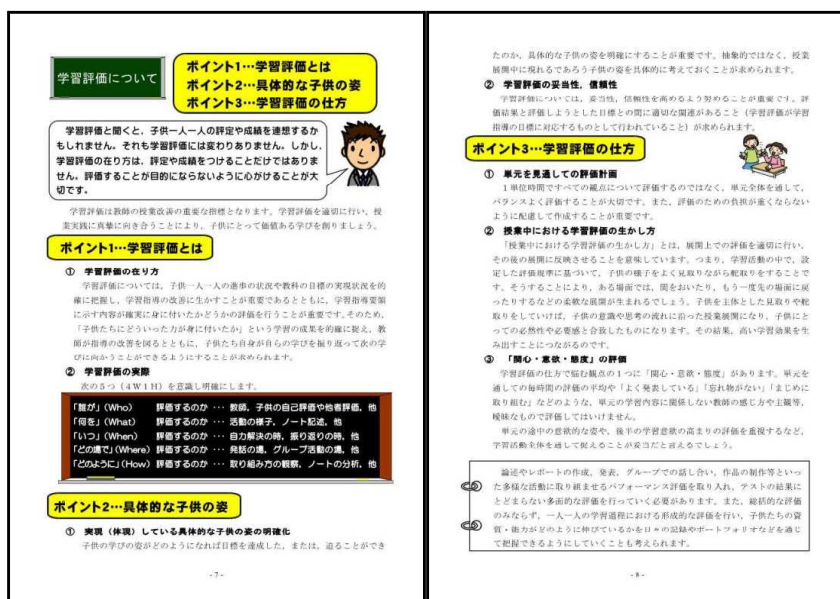


図4 学習評価についてのリーフレット

VII 研究の成果と課題

平成26年・27年度の教職2年目の教員を対象に「授業点検シート」、「授業振り返りシート」を用いた振り返りを行い、経験年数の浅い若手教員が抱えている授業づくりへの課題を収集した。

1・2年次の取組^{*1}に加え、平成28年度は、児童生徒が「主体的・協働的に学習する授業づくり」について扱うこととし、「学級・学習集団づくり」、「教材研究」、「単元（題材）設定」、「評価」の4項目について「とくしま 授業技術の基礎・基本3」^{*2}にまとめた。これは、総合教育センターで行う基本研修（初任者研修、授業力向上研修、教職5年次研修、10年経験者研修）で研修資料として用いたり、校内研修等で活用したりすることを想定しており、本センターのWebページにも掲載している。また、授業力向上研修受講者を対象に1年次に作成した「とくしま 授業技術の基礎・基本」^{*3}の活用状況についてアンケート調査を実施した。「とくしま 授業技術の基礎・基本」の活用状況については、小学校81.6%、中学校60%、高等学校62.9%、特別支援学校53.3%、養護教諭94.4%が活用しており、「授業改善に役立った」、「児童生徒の学習意欲の喚起が図られた」、「校内研修等で役立った」という回答があった。一方で、「授業場面で活かし切れていない」、「生徒・学校の実態に合わない」などの意見も見られたが、冊子の改善点や研究の課題について考える機会となった。

本研究は3年間の継続研究であり、調査結果と改善点や課題については、十分に明らかにできなかった面もあるが、今後もこれらの取組が若手教員の授業力向上に寄与するよう、研究を続けていきたいと考えている。

*1 徳島県立総合教育センター『研究紀要第94集』，2014年，1～10頁(http://www.tokushima-ec.ed.jp/files/education_document/kenkyu_kiyo/pdf/H26kenkyu_kiyo.pdf)。

*1 徳島県立総合教育センター『研究紀要第95集』，2015年，1～10頁(http://www.tokushima-ec.ed.jp/研究紀要/?action=common_download_main&upload_id=1593)。

*2 徳島県立総合教育センター「とくしま 授業技術の基礎・基本3」，2016年，(http://www.tokushima-ec.ed.jp/教職員支援/学力向上関係資料/?action=common_download_main&upload_id=3571)。

*3 徳島県立総合教育センター「とくしま 授業技術の基礎・基本」，2014年，(http://www.tokushima-ec.ed.jp/教職員支援/学力向上関係資料/?action=common_download_main&upload_id=1339)。

参考文献

- ・徳島県教育委員会「平成27年度初任者研修のしおり」，2015年
- ・徳島県教育委員会「平成27年度授業力向上研修の手引」，2015年
- ・文部科学省「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」，2016年